

長年、マジロ環礁を中心にマーシャル諸島に散らばる各環礁の取材を行なってきた越智隆治。
雑誌などのメディアで見るマーシャルの写真のほとんどが彼の作品であると言っても過言ではない。
マーシャルを人気ダイビングエリアにした立役者のひとりである。
また今回、初のマーシャル取材となった鍵井靖章は、
2年前から満月の光でマジロの豊かなサンゴ礁を撮影したいと希望してきた。
マーシャル・ベテラン写真家とビギナー写真家は、
レンズを通して、この海がどのように響いたのか……!

鍵井 靖章 × 越智 隆治 ふたりの写真家が見た マーシャル諸島共和国

Photo & Text

Yasuaki Kagii (マジロ環礁、アルノ環礁、セレンディパー アイランドリゾート)

Takaji Ochi (ミル環礁、ジャルト環礁、リキヤップ環礁、ビキニ環礁)

Special thanks

Marshall is, Marshalls Dive Adventures, Serendipper Island Resort

Marshall Islands

www.web-lue.com

Web-lue 2006. Summer



Information Link
<http://www.e-mit.net/>

←click! 情報HPへジャンプ

鍵井 靖章、 マジュロに立つ。

グアムを早朝に発つ飛行機はトラック、ポナペ、コスラエ、クアジェリンとアイランドホッピングを続けてマジュロに到着する。大変な道のりだが、ひとつひとつの島を上空から見下ろすことができるのも楽しみのひとつである。

マーシャル諸島の国際的な玄関口であるマジュロ島に到着する。飛行機のタラップから降りると南国の暖かな空気がシャツの中まで入り込んでくる。イミグレーションのある建物まで向かうと、空港敷地内と仕切るフェンス越しにムームーというカラフルな衣装を身に着けた女の人や子供たちがたくさん並んでいる。頭上を見上げると薄色の下弦の月が見えた。今回の取材のテーマは月明かり光に照らされたサンゴ礁を撮影するものだった。これは、数年前から現地ダイビングサービスのマーシャルズダイブアドベンチャーズの吉居さんをお願いしていた企画だった。今回、念願叶ってやっと実現となった。

幸先良く暮色の空には、もうすぐ満月になる大きな月に迎えられた。良い取材旅行が始まる予感がした。(鍵)



01



02



03

01:ヤシの木が印象的な小島。マーシャルではこんな素敵な景色がたくさんある
02:カロリン島の浅瀬のリーフ。干潮時には、サンゴ礁が顔を出す
03:外洋のポイントでのダイビング後、ハシナガイルカがボートに遊びに来てくれた

マーシャルの代表的なダイビングエリア マジュロ環礁を潜る

私はマーシャルに関してほとんど知識がなかった。雑誌などの特集記事を見るとマーシャルやマジュロという名前がよく紹介されている。見事なサンゴ礁が広がっているということは知っていたが、それ以外の知識は全然なかった。ダイビングセンターに到着して、今回取材をお手伝いしてくれる春川純さんに「マーシャルとマジュロはどう違うの?」ととぼけた質問からこの取材は始まった。私はどんな写真が撮れる、またはどんな写真がとりたい、ということは、明確に分かっていても、それ以外の基本的なことで抜けていることが多い。答えは簡単だった。マーシャルは国名で、マジュロは環礁名だった。マーシャル諸島共和国は29の環礁と5つの島から成り立っている。マジュロ環礁、アルノ環礁、ミリ環礁などがある。今回はお世話になるママーシャルズダイブア

ドベンチャーズがあるマジュロ環礁を中心に、アルノ環礁にまで足を伸ばすという取材内容だった。

到着して翌日、朝8時に集合して、ダイビング器材やカメラ機材を積んでも十分なスペースが確保されているスピードボートに乗り込んだ。向かった先はマジュロ環礁のカロリン島、所要時間は約40分だった。右手には、いくつもの島が直線上に並んでいる。大きさは大小様々だった。ヤシの木の本数と島のサイズが比例しているのが面白い。ヤシの木が数本の小さな島が2つあった。南の島らしい風景をここマーシャルでは簡単に手に入れることができる。以前、先輩のカメラマンは、このような島を見つけるために、モルディブでドーナと呼ばれる地元の船を貸しきって、撮影に取り組んでいた。

最初に潜り込んだポイントは「カロリンインサイド」というダイビングポイントだった。豊かなサンゴ礁が目の前に突然現れた。色々な造詣をしたサンゴが圧倒的に迫ってくる。私の持つ超口角レンズで切り撮る作業を開始する。いろんな要素があり過ぎて、うまく纏まらない。また思っていたほど、アクセントになるピンクや紫色のカラフルなサンゴ礁は少ない。続けて「エターナルエデン」に潜った。大きなテーブルサンゴの丘が広がっていた。直径は優に私の背丈を越している。海の中で見るから、このサイズ

でも収まりよく見えるが、陸上でこの規模の生物はあまり見当たらない。そのスケールに合わせてか、大きなテンジクザメが2匹もテーブルコーラルの下で休んでいた。無造作に放置されているサンゴが重なり、まるで、舞台裏の大道具置き場のようだった。

このような環礁内のポイントの他に、マジュロでは外洋とチャネルのポイントがある。外洋のポイントは、環礁内の海の色とまた違う。より澄んだ青色をしている。今回エントリーした

豊かな海、 マジュロ環礁を楽しむ

「シャークリーフ」と「タラップ」ではサンゴの様子も異なった。「シャークリーフ」はリーフトップに大きなテーブルコーラルが密集し、この海の豊かさを象徴している。ネムリブカやツマグロといったサメの他、深度を落とすとヘルフリッチなどにも会える。「タラップ」はテーブルサンゴだけではなく、様々なサンゴ礁がコンビネーション良く並んでいる。外洋側ではナンヨウツバメウオの群れやイソマグロ、ナポレオンもいる。私のイメージとしては、子供たちがサンゴ礁の海の絵を描く時、きっとこんな世界を想像するのだろうと

思って眺めていた。海としてとてもバランスが良いと思った。

また、チャネルにある「アクアリウム」は人気No.1のポイントでもある。外洋と環礁内とを行き来する潮に乗りながら、ギンガメアジの群れやイソマグロ、サメなどの大型魚との遭遇を楽しむ。

マジュロでのダイビングは環礁(ラグーン)という環境を最大限に活かしたダイビングを行っている。壮大なサンゴ礁はもとより、外洋系の魚から人気のマクロの生物まで魅力は尽きない。

外洋のポイント「シャークリーフ」での1コマ。流線型の美しいメジロザメが何度も私たちの目の前を横切った

マジュロ環礁の海のなかには、
サンゴで出来た小さな宇宙だった



ガイドのウォルシーについてサンゴの宇宙を漂った。
実はこの大きなサンゴの上に可愛いギンボが住んでいた

マーシャルの夜楽

—月光に揺れる水面下のサンゴ礁—



島の近くまで豊かなサンゴ礁が月光に揺れる。幻想的な景色が広がり、時の流れを忘れさせてくれる。



マーシャルの夜楽 —月光に揺れる水面下のサンゴ礁—

夜、スピードボートで撮影に向かう時、空には満月が浮かんでた。柔らかな光に周囲は包まれる

滞在中に3夜連続で月の光に揺れるサンゴ礁の撮影を行った。撮影地として選ばれたのはマジュロ環礁にあるカロリン島。港を出発したのは、午後6時過ぎ、辺りが暮色になり始めた頃だった。事前に確認していた浅瀬のサンゴ礁を再度チェックするために、早めの出発をお願いした。また、浅瀬のサンゴ礁にボートを走らすため、座礁の危険性も回避するためでもあった。カロリン島は無人島ではない。ヨシダさんという日本名のような呼び名の有る現地人ともうひとつの家族が海岸線に住んでいる。

日が暮れると共に家屋に灯が点るが、それはささやかなものだった。

7時前にカロリン島に到着し、海岸線のほんの手前で碇を下ろした。まだ、周囲は明るかった。私は早速、ウェットスーツに着替えて、スノーケリングを開始した。浅瀬のサンゴ礁を再度確認したが、まだ水位が高かった。干潮の時間帯を待ち、サンゴ礁が水面下ギリギリの状態になった時に撮影する予定だった。満月の光に照らし出されたその海中の世界と、カロリン島の連立するヤシの木と同じ写真

に写し込む、半水面と手法を考えていた。ガイド陣は、潮が引くとサンゴが水面から出る、と何度も教えてくれたが、私自身がその状況を確認したわけではない。いったいどれほど望んだ状況になってくれるのだろうかと思ったが、あまり考えていても仕方がないので、そこは呑気に構えることにした。そうしているうちに辺りは暗くなり始めたが、肝心の月には厚い雲が覆っている。時折、上空の風に押された雲の隙間から月が姿を見せるが、そう長くは続かなかった。調べてもらった干潮の時間は21時51分。

まだまだ時間がある。同行してくれた現地人のデミアンとジェイコップとボートの上でそれぞれの家族のことについて話した。デミアンは30歳で子供が6人いるという。ジェイコップは2人だという。デミアンの長男は14歳で今、シアルトで勉強しているという。息子の話す英語はさっぱりわからないと話してくれた。ジェイコップの長男も同じくシアルトで生活しているという。私が予測もしなかった、羨ましくも思える環境を子供に与えていた。また、大自然の中で、子供が6人もいるというデミアンの話を聞いて少し羨ましく思った。子孫を繁栄させる、自分のDNAを後世に残していく、生き物としての彼は強く生きていると思えた。

その後、私は意識を撮影に集中させた。まだ潮が引いていない海に入り、干潮時を予測した準備と月の光を待った。三脚に防水ケースに入れたカメラを装着し、お目当てのサンゴの前でその時まで静かに半身を海に浸していた。私はこんな撮影の時でも時計を持っていない。いったいどれだけ時間が経過したのだろうか、潮が引き始め、月も雲から抜け出し、明るく海面を照らした。キヤノンの最新デジタルカメラ5Dで50カットほど撮影した。カメラ背面の小さな液晶に目では見ることのできない光に照らし出されたサンゴの細部までが再現されている。時折、大きな雲が月を覆い、辺りは真っ暗な世界に飛び込む。約2時間ほど撮影し、少し手応えを感じたのでカロリン島を後にした。早速、ホテルに戻って、コンピュータのモニターで画像を確認する。イメージしていた写真に近かったが、粒子が粗すぎる。光量の弱い撮影だと思い、カメラの感度をISO500を選択していた。それが失敗だった。モニターに映る月夜のサンゴ礁の写真はまるで紙やすりの上に描かれた古い絵画のようだった。

2日目の夜も同じ場所にいた。半身を海に浸し、三脚を付けて構えたカメラの前で静かにその時を待っていた。その夜の空も雲が多かった。港を出発してから辺りが暗くなるまで、一度だけしか、月の姿を見ることができなかった。それでも、満月は必ず出ると信じ、ウェットスーツを着込み暗い海へと梯子を降りて行った。入水したのは午後8時。今日は満月で、昨夜よりも干潮の時間が30分ほど遅い。

背後から満月の光が照らし出すと、夢中になって撮影を開始した。今回はカメラの感度ISO100を選択したので、シャッタースピードが昨夜よりも数倍長くなる。絞り値も少し開放に近づけた。シャッターを押し続けている時間は約1分だった。いくつかポジションを変えた後、カメラのレンズ先近くまでサンゴに接近させ撮影していると、音を立てて潮が引いていくのがわかった。水面に顔を出したエダサンゴの合間を水がピチャ、ピチャとリズムカルに流れていく。その水の動きを少し眺めていた。私のなかで何かがすっーと引いていく感じがした。私のこころになかにある汚れたものが洗い流されていく感じがした。

満月の夜に、新しく生まれ変われるかもしれない、そんな気持ちにさせてくれた。

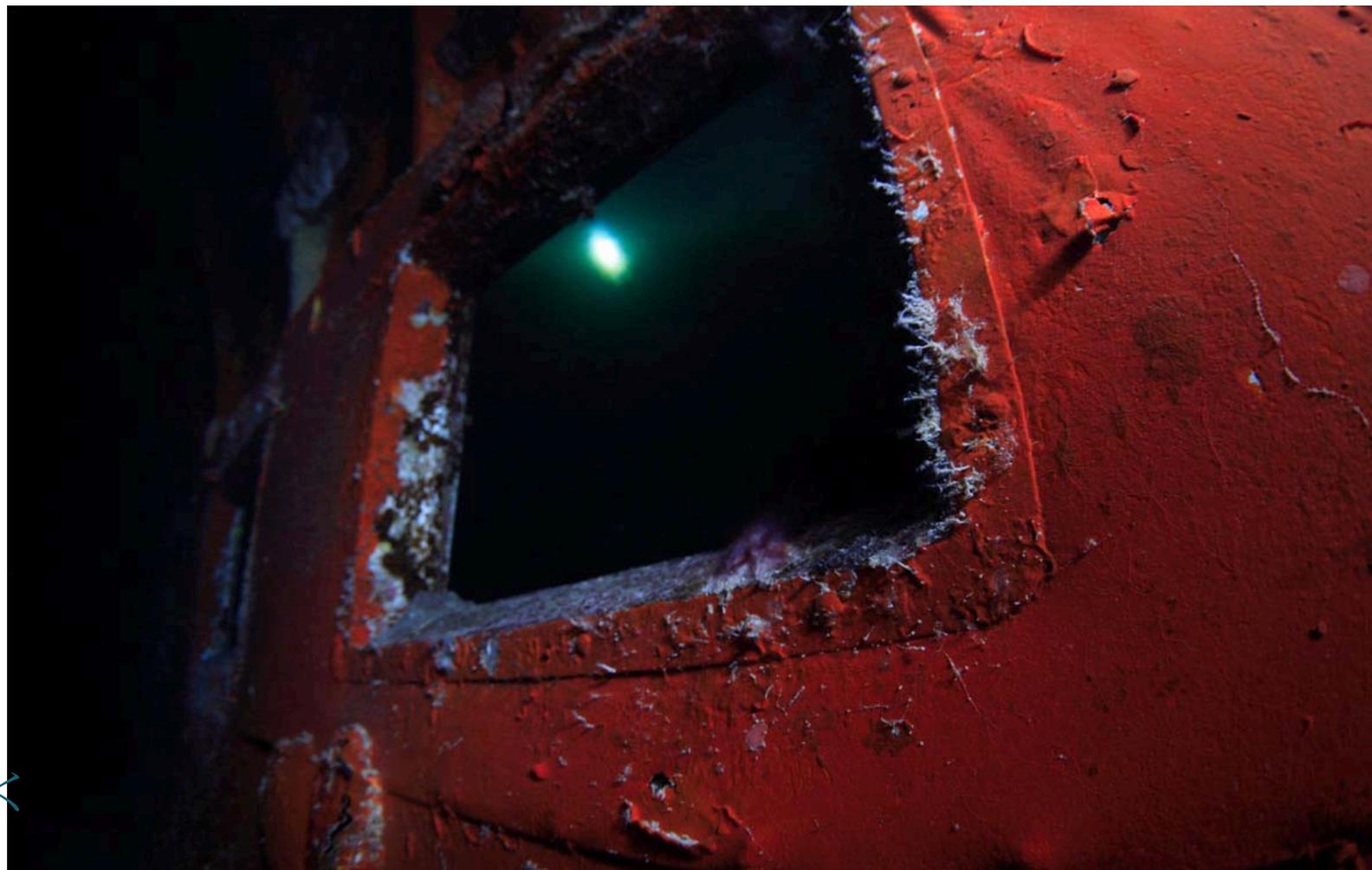
翌晩も月明かりのなか水中撮影に出掛けた。ガイドの春川さんが選んでくれたポイントは水深

6mほどに飛行機が鎮座しているポイントだった。機体に入り込み、真っ赤なカイメンで彩られた窓から水面に映る月が見えた。不思議な光景だった。夜の撮影をしていた3日間、朝から晩まで撮影し続けた。昼は豊かなサンゴ礁に潜り、夜は月夜の礁原を楽しんだ。現実の世界と幻想の世界を慌しく行き来している感じだった。本当に眠っている時間がもったいなかった。

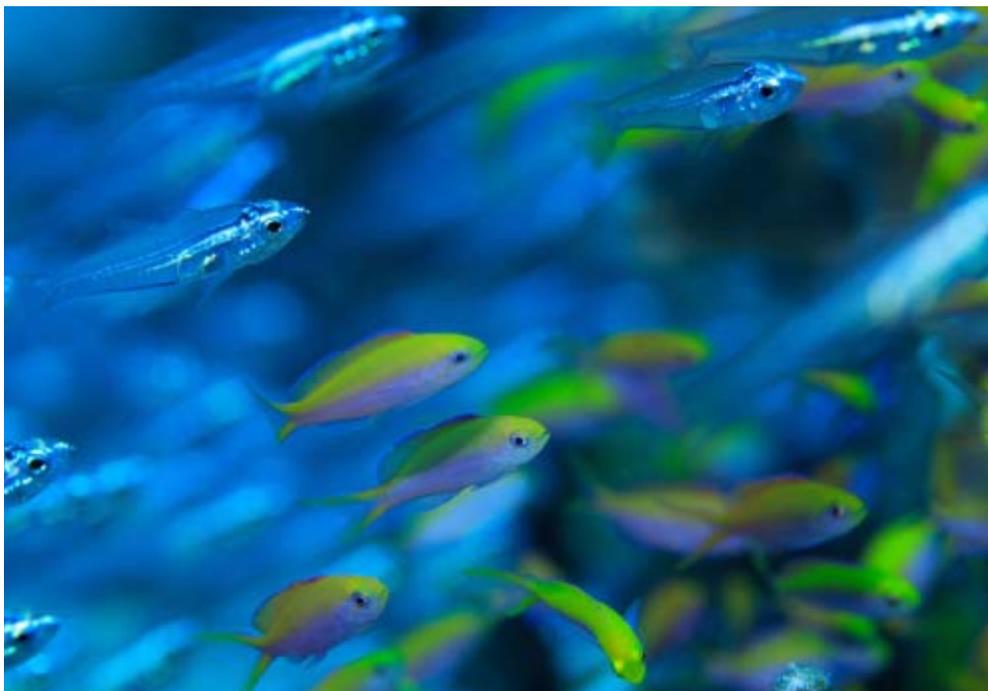
Camp Stay Information

※マーシャルダイビングアドベンチャーではカロリン島のキャンプステイも計画しています。月夜の礁原に興味のある方は問い合わせてください。満月の干潮時、ビーチからすぐ目の前にサンゴ礁は広がっています。

浅い水深に鎮座している飛行機のポイント。赤い窓が印象的で、その向こうには水面に映る満月が見える



現実と
幻想の狭間にゆらめく
サンゴの夢



01



02

01:バートレットアンティラスとキンメモドキが岩陰で群れていた(アルノアルノ)
 02:クマザサハナムロの群れがリーフを覆う。青い海水は心に優しい(アルノアルノ)

03:アルノ環礁の水の色も極上だ。何色もの青色を教えてください
 04:ギンガメアジの群れがリーフに延びる(イリアン)



03



04

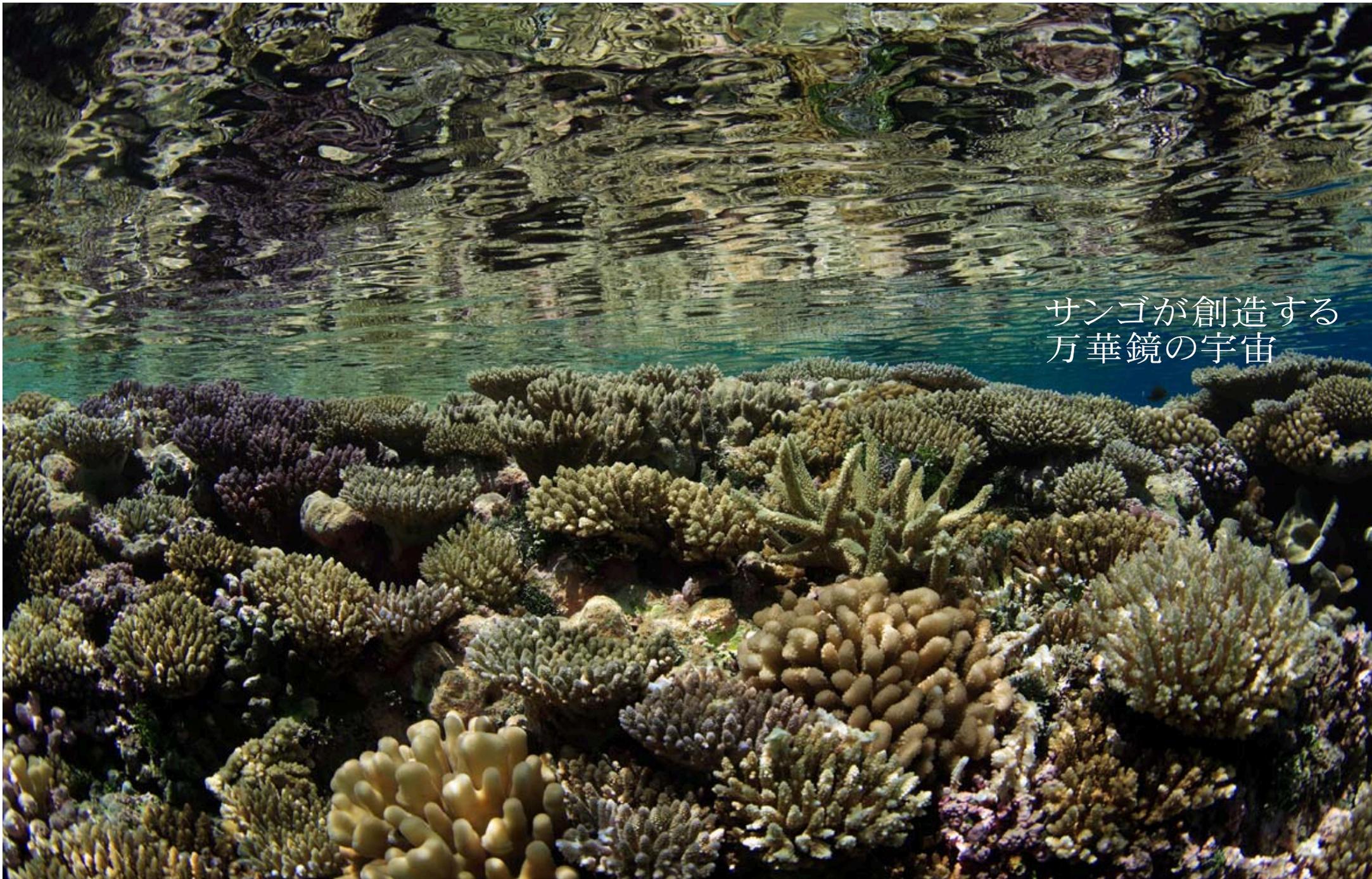
近隣のアルノ環礁へデイトリップ!

取材2日目と4日目の最終日はアルノ環礁へ足を延ばした。またアルノ環礁で驚いたことは透明度の高さだった。ボートから見える海の色は、ロタやテニアンなどの海の色に似て、それだけでも十分に幸せにしてくれた。どこまでも透き通るような透明度ではなく、ほんのり青色に染まっている。それが上品で良い。

ダイビングセンター前の港からスピードボートで約50分のところに「イリアム」と「アルノアルノ」という素敵なポイントがる。「イリアム」では、ブリーフィンバラクーダの群れだ。ギンガメアジは渦ではなく、まるで帯のようにリーフの上を泳いでいた。数匹の個体が、体色を黒く変化させ、求愛行動を行っている。恋するギンガメのオセロのペアは、まるで当てつけるかのように私の目の前で旋回を繰り返した。またイエローフィンバラクーダの群れは、現地ガイドが言うタイワンカマスのこと。イエローフィンバラクーダが正式名のバラクーダがいるが、ここでは体色からタイワンカマスがそれになっている。正式英名の方を期待していたら、拍子抜けするかもしれないが、しかしそれもご愛嬌だ。

「アルノアルノ」は白い砂地にサンゴのパッチリーフが点在するポイント。エントリーして真っ白な砂地に降りていくときの心地良さは最高だ。まるでオブジェのような小さなサンゴ礁を巡り、リラックスが続く。キンメモドキとスカシテンジクダイが群れるパッチリーフで、まるで青空を見上げるような姿勢のハダカハオコゼも見つけた。このポイントは太陽の光を味方につけて、眩しくてさわやかな世界を仕立て上げる。

またランチの時に係留するリーフでのスノーケリングもお勧めしたい。特に、干潮時ではリーフの際に群生するサンゴが水面に映って万華鏡の世界を創造する。ダイビングとはまた違った楽しみがある。サンゴの海の宇宙を何も付けずに泳ぐのだ。マーシャルズダイブアドベンチャーズの吉居さんは、アルノ環礁でたくさん潜った結果として、「イリアム」と「アルノアルノ」、そして「ノースポイント」を推している。同じ環礁でありながら、環境の違うダイビングを楽しむことができる。その選択の良さはさすがだ。ランチタイム後のスノーケリングも併せて、マーシャルに出掛けたならば、是非アルノ環礁に向かって欲しい。



サンゴが創造する
万華鏡の宇宙

アルノ環礁でのダイビングの合間、ランチを終えた後にスノーケリングでサンゴ礁を散策。これがまた楽しい。

海況が安定した日に視察も兼ねて、アルノ環礁の「ノースポイント」に向かった。通常はダイブクルーズで潜るポイントである。ブリーフィングでは潮当たりの良いコーナー付近で潜り、サメやバラクーダの群れを見る予定だった。しかし、潮流が弱く、ガイドのウォルシーの判断でエントリー場所少し変更した。青い海の先に広がるリーフを目指して潜降した瞬間、そこに広がる生命の輝きに一瞬にして心奪われた。まるで生まれたてのような無傷のサンゴ礁が面々と続いていた。小さな白い砂地に降り立ってキャベツコーラルと呼ばれるサンゴの撮影を開

始した。透明度の高い青い海の中で、緑色に染まったそのサンゴは一際目に留まる。まるで手前に零れ落ちそうなほどの勢いで波打つその美しい造形に夢中になってシャッターを切った。

ガイドの春川さんがゲストに話していたことを思い出していた。「マーシャルはサンゴ礁でとても有名なになりましたが、別にここが特別なわけではないのです。他の海だってそうなのです。ただ、残念ながら人は失ってからその大切さに気づくことが多いのです。この海のサンゴ礁はそんなふう気付く前に守っていききたいのです」。

時折、海の世界を覗けたことに感謝することがある。それはこんなふうはまだ、あまり人が見たことがない光景に立ち会えた時だ。

リーフに向かって白い砂地の道が何本も走っていた。私はその先に広がる世界を確かめるため導かれるようにフィンキックを続けた。



03



04

03:健全なサンゴ礁に群れる無数のデバスメダイ
04:ブルーウォーターを漂っている、ウメイロモドキの群れが私たちを取り囲んだ

ダイブクルーズで向かうアルノ環礁・ノースポイント 海の中にできたサンゴの道の先に広がる世界



01:海の中かで、まっすぐ続く道を見つけた。まるで導かれるようにその先に向かってしまう
02:まるで、毀れ落ちそうなくらい勢い良く成長するキャベツコーラル

01 02





01:バリなどからの調度品でまとめられた室内。のんびりと寛ぐことができる
02:1島1コテージ。滞在中はプライベートアイランドを存分に味わうことができる

01



03



04



05



02



06

03:ロマンチックな天蓋付きのベッド
04:島にはたくさのヤシの木が生えている
05:半屋外のバスルーム。広々とした空間が開放的
06:玄関の大きなドアを開けると、自然との一体感が楽しめる
07:風力発電など、エコへの関心も深まる



07

将来、マーシャルのエコリゾート・モデルケースとなる セレンディパー アイランドリゾート

昨年の7月、新発想のリゾート(セレンディパー アイランドリゾート)が誕生した。場所はマジロ環礁内の無人島。周囲わずか280mの小島には、宿泊用のバンガローが1棟だけある。バンガローには、広いリビング、キッチン、ベッドルームが完備されている。天蓋付きの豪華なベッドやバリ製の家具が置かれている。キッチンでは自分たちで料理することもできるし、専用のシェフをアレンジすることもできる。

このリゾートの特徴は、エコロジーに対する取り組み。エネルギーは風力発電、太陽光発電、ココナッツオイ

ル発電、太陽熱温水器、バイオトイレ、省エネ電力の日本製の家電品や電球を取り入れている。自然保護を大切にしたい島貨切のリゾートなのだ。

セレンディパーは「思いがけず幸運な発見をする人」という意味。

MrChildrenの櫻井和寿さんや音楽プロデューサー小林武史さんが出資する、市民バンク「APバンク」から融資を受けて建設。そのバンクを通じてリゾートの名前を募集し、「セレンディパー」という名前に決定した。

極楽リゾートとして訪れるゲスト、エコロジーを意識したゲストなど来島の理由は様々。ただ、これから環境や未来についてどうすれば良いのか? というヒント(=思いがけず幸運な発見をする人)になれるかも知れない。宿泊して楽しかったというだけでなく、他のリゾートとは違ったメッセージを受けることがこのリゾートではできる。

「現在、マーシャルの人口の約50%は子供である。物はあるけど、仕事がないという状態で、その行く末を不安に思います。島の経済を支えるために観光発展

は不可欠なもの。ただ、観光発展のために、自然環境が蔑ろにされるのは、本末転倒だと思います。観光発展と自然保護を意識したエコリゾート、セレンディパーは将来のマーシャルのモデルケースになれば良い。マーシャルの人たちに見せるモデルハウスとして存在して欲しいです」とマーシャル吉居さんは最後に語ってくれた。

<http://www.majuro.jp> Link!

越智 隆治、 マーシャルの 離島環礁を巡る

マーシャル諸島共和国は、29の環礁と5つの独立した島から構成されている。2006年5月、WEB-LUEロケで、鍵井カメラマン

が日本からのダイバーがデイトリップで訪れることのできるマジュロ環礁、アルノ環礁への取材を行ったが、そ

の他の環礁でも様々なスタイルでダイバーの受け入れを行っている。どのようにしてそれらの環礁に潜りに行くのかと言うと、首都のマジュロから、チャーターベースでダイビングクルーズ船で行く場合や、国内線で各環礁まで行き、そこにある宿泊施設に滞在してダイビングを行うパターンなどがある。僕は1998年から今までのマーシャル訪問の間に、数環礁をリサーチダイビングも含めて訪れる機会を得た。この章では、それらの遠環礁に関する個人的な印象を紹介していきたいと思う。(越)

Ochi in Marshall Islands



01



02



03

01:米駆逐艦カーライルの対空砲が静かに水面に向けられていた
02:米潜水艦アボゴンの船体には、無数のムチャギが付着し、不思議なオブジェを形作っていた。水深60m
03:船底を上にして沈んでいる戦艦長門のブリッジ部分は、根元からへし折れて横倒しになっていた

世界屈指のレックダイビングポイント

初めてマーシャルを訪れた1998年当時、僕はまだ新聞社に籍を置いていた。取材の目的は、マジロ環礁から北北西に約800km離れたビキニ環礁でのダイビングだった。同環礁では、太平洋戦争後、アメリカ合衆国による核実験が行われていたことをご存知の方も多いだろう。特に水爆実験ブラボーによって、1954年に日本のマグロ漁船第5福竜丸が「死の灰」を浴びて被爆した事件は、多くの日本人の記憶に残っている。

環礁内部、「ターゲットエリア」と呼ばれるポイントには、初期の核実験でターゲットにされて沈んだ約100隻の軍艦などが沈んでいる。特に有名なのが、太平洋戦争終戦後も唯一自力航行可能な状態で残った日本の戦艦「長門」や、アメリカの空母「サラトガ」などの大型軍艦。

最後の核実験終了から、すでに50年以上の歳月が流れ、今ではシーズン中には欧米人のテクニカルダイバーを中心に人気を集める、世界屈指、究

極のレックダイビングポイントになっている。

多くの軍艦が沈んでいる海域は、水深60mに達する。環礁の中にありながら、海の透明度が高いため、暗さや恐怖を感じることはなかった。ただ、これほど長時間水深60m近い海底に留まっていることは初めての経験（その後もそんな経験はないのだが）だったので、空素酔いにならないか心配だった。

巨大な軍艦の船内は、光がまったく届かない暗闇だ。水中ライトを照らすと、そこらじゅうに魚雷が散乱している格納庫などもあり緊張した。「魚雷などには、いまだに信管が着いたままで爆発の可能性があるから絶対に触るな」。ダイビング前にブリーフィングするガイドのシリアスな表情が脳裏にこびりつき、心臓の鼓動が早まるのを感じた。



初めて訪れた離島環礁で出会った 素朴な子供たちの笑顔

1998年のビキニ環礁取材の翌年、僕は新聞社を退職した。マーシャル政府観光局の行う離島環礁撮影プロジェクトのメインカメラマンとして働くためだ。その最初のプロジェクトの目的地がジャルート環礁だった。1920年から1944年までの日本統治時代にはマジュロではなく、このジャルートがマーシャルの中心地だったこともあり、日本軍の司令部跡や、空爆を受けて環礁内のビーチに座礁した日本軍の輸送船などが目立つ。人口は1700人弱と聞いた。

マジュロの町の中と違って、島の中は綺麗に掃除が行き届き、清潔感があるのに驚いたものだ。この環礁を撮影に訪れたときには、体調を崩し、正直海の中の状況をあまりはっきり覚えていない。できれば、再びこの環礁を訪れてじっくりと潜りなおしたいところだ。

島の生活は静かに、ゆったりと時間が流れ、体調が悪かったにも関わらず、とても居心地良かったように記憶している。会社を辞めてフリーになった直後の自分自身の不安定な心情を無意識のうちに

癒してくれている。そんな感じだった。

子供たちは純粹で、僕たちが手を振るとはにかみながら笑顔を見せてくれた。ウクレレを持った子供たちに「何か歌って」と問いかけると、嬉しそうにしながら一斉に現地の歌を歌ってくれたのを思い出す。ちょっとびっくりしたのは、ビーチで撮影していると、子供が熱帯魚を素手で捕まえて、そのままバリバリとスナックのように生魚を食べ始めたこと。「食べる?」というように僕にも差し出してくれたのだが、さすがに生臭くて食べれなかった。申し訳ないことをしたな。……と今でも思いかえすが、ほとんどのモノは食べれる僕でも、あの生臭さは、ちょっと無理だった。



01



02

01:ミリ環礁への入り口のチャネルにある美しい形をした島
02:チャネルの海底には巨大なインパナが群生していた
03:巨大なシャコ貝の上にサンゴが成長していた



03



04

04:各環礁に一つあるというバードアイランドは、上陸が制限されていて鳥たちが保護されている
05:夕日に染まるミリ環礁の島



05

マーシャルの ニューダイビング ディスティネーションとして 期待大のミリ環礁

ミリ環礁は、マジュロから100kmのところまに位置する。アルノ環礁の南の海上を、さらに南南東へと進むと、ミリ環礁が姿を見せる。僕はこの環礁に今までに2回訪れている。ワウという小さな島に宿泊施設にステイしたのだが、島には食材も飲料水も無く、マジュロで滞在日数分の食材と水を買って込んでダイビングボートに積み込んで出かけた。バンガローのあるキャンプ場にボートで遊びに行くような感じをイメージしてもらえればよいだろう、今はダイビングクルーズ船でのマジュロ環礁からのチャータートリップが年数回行われている。小さなかわいらしい島々が点在するマーシャル諸島の島々の中でも、僕が今までで一番気に入っている風景がミリ環礁にはある。以前紹介した記事でも「ここはまるで天国のような場所」という表現で、この環礁を紹介した。

環礁内部の遠浅のリーフには、サンゴを積み重

ねて作られた巨大なフィッシュトラップがある。「これが作られたのは500年以上前とも、1000年以上前とも言われているんだよ」と現地の人が教えてくれたが、「本当なのだろうか?」と思うくらいにしっかりしていた。「今でもちゃんと使っているから、修復されているんだよ」との答えだった。

環礁が広いせいか、環礁内でイルカの姿を何度か見かけた。外洋のポイントをリサーチすると、無数のサメが僕たちを興味津々に取り囲んだ。海がすれていない証拠だ。

この環礁のさらに南にはノックス環礁という小さな環礁が付属していて、そこが魚影の濃い海だという話は聞いてはいるのだが、まだ潜りに行く機会を得ていない。



01



02



03

- 01:リキヤップ環礁内部には、やはり元気にサンゴが成長していた
- 02:飛行機の到着は島の一大イベントでもあり、子供たちが見学にやってくる
- 03:美しい白砂のビーチが自慢のリキヤップ環礁のラグーン
- 04:この環礁を訪れた記念に、サンゴや貝に自分の名前を残す



04



島の子供たちは美男美女が多い

美しい白砂のビーチが広がる

最後に紹介するのはリキヤップ環礁。位置的にはビキニ環礁とマジロ環礁の丁度中間地点くらいに位置する環礁だ。エアマーシャルアイランドというマーシャル唯一の国内線で舗装などしていない、整地しただけの島の空港に降り立った。どこの離島環礁でもほとんど同じなのだが、何も無い島では、1週間に1便の飛行機が来ることも一大イベント。

子供だけでなく、大人たちも空港に集まってきている。ただ見学するだけの人もいれば、運ばれてくる物資を心待ちにしている人、久しぶりに島に戻ってきた親族を出迎える人、その反対に見送る人。僕らはそんな中でも、久しぶりに訪れた外国人とし

て、子供たちの好奇心の対象になる。

他の環礁は全てマーシャルのイロージ(酋長)が所有しているのだが、この環礁だけは、ドイツ統治時代にヨーロッパ人に土地の所有権が譲渡されたそう。そして、その子孫がいまだにこの環礁で生活が続いている。だからだろうか、心なしかこの環礁に住む女性たちは美人が多い。敬虔なクリスチャンも多く、日曜日には島の中心にある黄色い小奇麗な教会には、教会の前のマリア像に捧げる花輪を持った島民たちが集まってきて、あっという間にマリア像が花に埋もれてしまう。

環礁の中は、マジロのように珊瑚礁が発達して

いるようではなかったが、海はとにかく抜けるように青い。今まで訪れた環礁の中では、一番の広くて美しいビーチが広がっていた。

どの島もほとんど一度だけの来島で、なかなかポイント開拓に時間をかけられなかったのも確かだ。しかし、当時よりも海に対する経験も知識も豊富になった今、もう一度これらの環礁を訪れて、あらたな海と島の魅力を皆さんにお伝えできる機会がまた訪れることを願っている。

—— 越智さんは'97頃から毎年、鍵井さんは今回マーシャルに行かれるのは初めてということですが、なぜ今回2人でマーシャル特集を組むことになったのですか？

越智 なんとなくマーシャルの特集をしようっていう話は前からあって、以前、鍵井君の講演会があったときに、彼がおもしろい写真を撮ってるのを見て、こういう感じで撮影すれば、新しいマーシャルの魅力を表現してくれるんじゃないかっていうことになって頼んだんだよね。

僕、表現するものがけっこういい加減でなんで、というか、あまりこだわりがないんだけど、鍵井君はすごいこだわりがある人なんだよね。だから、鍵井君がどんな写真を撮るのか見てみたかった。

それに、僕はもう十数回もマーシャルに行っていて、写真で表現するという意味では、あきちゃった人だから（もちろん観光者としてはのんびりにまた行きたいけど！笑）写真を撮る感性としてはパターン化してきていると思うし、新鮮な気持ちで鍵井君が行って撮ることで、僕が気づけなかったこと、同じ風景を見て、彼がどんなことを感じたのか興味があったし。

月明かりの写真も、僕、夜眠いから寝ちゃうんで。（笑）

鍵井君は起きてるじゃん。

鍵井 いや、そうでもないですよ？（笑）

僕は前からマーシャルに行ってみたかったし、月明かりの元で、サンゴ礁を撮りたかった。実はこれ2年

越しの計画だったんです。それにしても、なんて疲れる取材なんだ、と思いました。朝は早くて、ダイビング、スノーケリング、ダイビング、スノーケリング、月光での撮影……みたいな……。

でもねー、正直マーシャル行く前は、越智さんの撮っているような写真はすぐ撮れると思ったんですけどね。それは無理でした。マーシャルを訪れた他の写真家の写真を見ても分かるけど、あれは数日間で撮った写真なんですよ。越智さんのはそうじゃないですよ。やっぱり時間をかけて、良いところ撮影してるな〜と改めて実感しました。また、越智さんが撮影した場所とか聞いて、同じ場所で撮影したのですが、なんかサンゴの様子が変わっていました。

越智 カメラマンは表現することにはとてもシビアだからね。難しいよね。人にすごいと思ってもらえるようなポイントは、大体決まってるんだ。でも、年によってはサンゴの状況で使えない時もあるね。

鍵井 そうなんですか？ 正直、マーシャルのサンゴ礁はどこを撮っても絵になると思って軽い気持ちでいました。でも、越智さんのような写真を撮影するのは難しかった。

越智 カメラマンはシビアだからね。人にすごいと思ってもらえるようなポイントは大体決まってるんで。

——今回の鍵井さんの撮影はどうでしたか？

鍵井 月明かりでの撮影は昔、モルディブでも行なっ



ジャングルのようなサンゴ礁が広がるマーシャルの海

ていました。その後も女性誌とかに企画を持ち込んだりして。「月光浴」という素敵な写真集があって、それ以降は月の光で撮影するという写真のスタイルが確立されてますよね。僕は、水中カメラマンだから、それを水中で行いたかったんです。

越智 どんな感じで撮れてるか楽しみだね。僕は面倒くさがりだから、よっぽど尻叩かれなるとなかなかできないよ。眠いし。

珊瑚は一度壊れたら治らな思っている人が多いみたいだけど、実は壊れて成長して、を繰り返しているんだよね。特にマーシャルの珊瑚は2年くらいのスパンでそれを行ってるように感じる。モルディブとかでは成長が追いついてないのは、ダイバーが入りすぎてるからかな〜？。

マーシャルの珊瑚は成長の具合がすごいんだよ、色はあんまりないけどね。だから逆にモノクロで表現した方がおもしろいんじゃないかと。造形だけに

注目できるから。

鍵井 同感ですね。今回使用したカメラはキヤノンの5Dが2台で、ネックサスとDIVのハウジング入れて撮影しました。カラーで撮影した後は、ピクチャーモードをモノクロにして、光とサンゴの造形を意識して撮影していました。それにしてもデジタルカメラは面白い。今回の月光写真もデジタルカメラの登場が、撮影に踏み切る後押しをしてくれましたし。

越智 最近はサンゴの状況が良くなって潜ってないんだけど、クニズコーラルガーデンやパーズンロードってポイントでは、下からオブジェみたいに珊瑚が林立してて、上に枝珊瑚がついてて、立ったまま煽って太陽の光を入れて撮れた。それから、アルノ環礁は透明度高いし、砂地好きな人にはいいんじゃない。フィン脱いで走ったりしたこともあるよ。迷惑だよ〜（笑）。

対談 越智×鍵井

今回のロケで初めてマーシャルを訪れた鍵井カメラマンと、10年近く毎年訪れている越智カメラマンが、マーシャル諸島に関する率直な印象を語った



Marshall Islands

—気に入ったポイントは？

鍵井 アルノ環礁は良かったです。ひとつひとつのポイントが明確。アルノとイリアムはデイトリップにすごく良い組み合わせだと思いました。外洋のポイントもすごかったですよ、潜ったのはシャークストリートとダラップ。ダラップはテーブルサンゴと他のサンゴとのコンビネーションが良い。また、シャークストリートはメジロザメが3、4匹見れました。

越智 僕が昔潜ったポイント開発のときはもったいなかったからその名前つけたんだけど、あつという間に少なくなってきたな。

タカズポイントもいいよ。僕の名前がついてるんだけど、僕が初めてマーシャルを訪れた頃、一番気に入ってたポイント。今では開拓が進んで、あんまり行かなくなっちゃったけど。アカテンコバンハゼとか、モンツキカエルウオが沢山いるんだよ。

鍵井 マーシャルの良いところはダイビングとシュノーケリングの両方から海を楽しむことができることかな。シュノーケリングの場合、裸に近い状態でサンゴ礁で泳いでしょ。越智さんがWEB-LUEの創刊2号のマーシャル特集で、「母親の羊水のような優しさを持つ海」というサブタイトルを付けていたじゃないですか、あれ、わかるような気がしました。

越智 マーシャルのいいところは環礁の中の小さな珊瑚のリーフを回るポイントが多いからお客だけでセルフで潜っても、上から見えてるし、環礁に守られてるからカレントも無くて初めてでも不安なくいけるんだよ。そういうポイントっていっぱいあるとあんまりないよ。

—これから行きたいところはどこですか？

鍵井 ビキニ環礁とリキャップ環礁行きたいな。ビキニで戦艦長門も見たいですし、あのサメの集団の

撮影もしたい。

—マーシャルはどんな人にもいいと思いますか？

越智 珊瑚といっしょに光合成したい人。水中で幽体離脱したい人。(笑)

—陸ではどこを撮りますか？

越智 ローラビーチで撮ってたんだけど去年行ったら、侵食の具合がすごかったよね。木が全部倒れてた。あれを見て、温暖化の進みが速いなあ、と思った。前ローラビーチってすごいきれいだったんだよ。

あのみんなが撮りたがる、海に向かって横に伸びてるヤシの木はなかなか見つけるのむずかしいんだよ。

—それはどこにあるんですか？

越智 カロリンとマイルセプンティーンは誰でも行ける定番なんだけど、他の場所は口では説明できないな。自分でドライブしてさがしてるから。

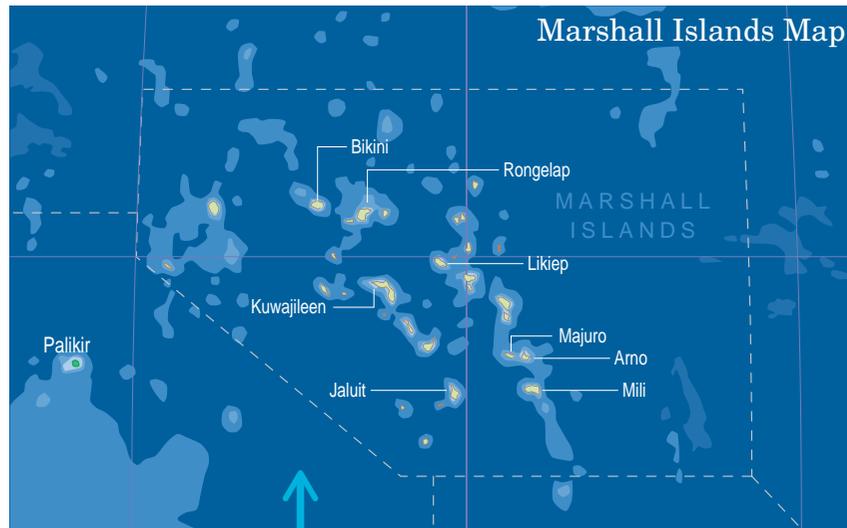
マイルセプンティーンはいいよ。パナソニックアイランドも写真撮りたい人にはいいかもね。

鍵井 僕は今回、あまりにも撮影が忙しすぎて時間なかった……。だからもう一度ゆっくりと行きたいです。今年の夏はグアムから直行便も飛ばしたいし。と言いつつ、今回はブラックライトを水中に持ち込んで発光するサンゴの撮影をしたいですね。マーシャルのあの豊かなサンゴが怪しく光出す、うあ、早くその企画も実現させたい!!!

—今日はどうもありがとうございました。



Information



お世話になったダイビングサービス



マーシャルズ・ダイブ・アドベンチャーズ(MDA)

マーシャルズ・ダイブ・アドベンチャーズ(MDA)としてはマーシャルの海の開拓はなかった、といっても過言ではない。オーナーの吉居氏は、マーシャルに移住して8年目。マーシャル南部固有のマジュロスズメダイの学名にはPomacentrus Yoshiiと名を残す。

マネージャーの春川氏は、海外のダイビングサービスでの経験も豊富。そして東京の大手ダイビングショップ及びダイビング器材販売会社さらにダイビング系旅行会社での勤務と、ダイビングのスーパーエキスパートな存在だ。他にも日本人ガイド、マーシャル人ガイドのナインナップも強力。また今夏マーシャルで就航するクルーズ船にもMDAのスタッフが常勤する。

2006年夏、グアムからの直行便でマーシャルがもっと近くなります!

<http://www.cruiseandisland.com/>

対談 越智×鍵井

Marshall Islands